地域情報（県別）

【福井】敦賀市では少ない在宅療養支援診療所としても機能-木村晃朗・医療法人明峰会理事長に聞く◆Vol.3

副院長と計30～40人を訪問、年に20～30人を看取る

2024年9月27日 (金)配信 m3.com地域版

「祖父と父の姿を見てきたから、それは自然なことだった」――。複数の高齢者施設やメディカルフィットネスを運営する医療法人明峰会（敦賀市）の木村晃朗理事長は、祖父・父の医師像に影響を受け、2000年の院長就任時から在宅医療も行っている。現在、敦賀市で在宅療養支援診療所に認定されているのは2つのみであり、「在宅もまた地域には必要」と木村氏。在宅医療への考え方、そして、経営者としての24年を振り返ってもらった。（2024年8月20日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら
▼第2回はこちら

木村晃朗氏（本人提供）

在宅医療の価値観に変化「家で最期が勝ちじゃない」

――医療法人明峰会は在宅医療も行っています。いつから、どんな経緯で始めたのでしょうか。

私が院長に就任した2000年から行っています。祖父や父が今でいう往診のかたちで患者さんに何かあれば深夜でも起き、ご自宅に行っていたんですね。子どものころからそんな姿を見続けていたので、「かかりつけ医は（在宅を）やっていくべきなんだろう」と、そんなイメージを持っていました。私が院長になったころ、長く通ってくれている患者さんから「お父さんがうちに来てくれたこともあったんだよ」と聞いたこともあります。

――今は佐々木規之副院長と2人で30～40人ほどを訪問し、年に20～30人ほどを看取っています。

患者数は落ち着いてきました。というのも、私の価値観が変わってきたためです。院長になったころは在宅医療にニーズがあると感じていて、その考えは今も変わりませんが、どこか意気込んでいたのでしょう、病院などからたくさん紹介を受けていました。私の意欲を評価してくださったのか、敦賀市医師会の会長から在宅部門を任され、会員

の先生方に在宅医療に関するアンケートを取り、地域の先生方がどれくらい在宅を行っているのかなどを尋ねたこともありました。

当時の私には少し偏った見方があったのかもしれません。「家で最期を迎えれば勝ち、そうでなければ負け」というような。それで必死にやっていたわけですが、やはり外来をしつつの在宅ではマンパワーに限界がありますし、経験を重ねるにつれてご家族の負担もひしひしと感じるようになりました。いくら私たちが頑張っても、患者さんを介護するご家族のしんどさは相当なものがあることを知りました。

敦賀市では長く、在宅療養支援診療所に認定されていたのは当院だけであり、最近になってもう一つ増えた状況です。最期に自宅で過ごせて、家族に見守られながらお亡くなりになる患者さんの中には、どこかすがすがしさのようなものを感じさせる人もいます。そんな姿を目にすると、やはり在宅医療は必要だと感じます。しかし、先述の点から「最期をどこで迎えようと、それまでの患者さん・ご家族の生活が充実していればいいのではないだろうか」――。そう思えるようになり、私も少し気持ちが楽になったところがあります。

院長就任後の習慣、毎朝気比神宮と山の神神社をお参り

――院長就任時のエピソードから快活にお話しされている印象ですが、事業を営んでいくうえではやはり大変さやしんどさも感じたのではないでしょうか。

これは、非常にありました（笑）。最初のころは憂鬱な気分になったことが少なくありませんでしたし、夜中に目が覚めてからいろいろと考えてしまい、眠れない日もありました。精神衛生上、良くないことは本当にたくさんありました。私の采配によって患者さんとご家族だけでなく、職員の人生にも影響しますし、高齢者施設をつくっていくうえでは資金調達ならびに土地の選定・契約なども重要になります。

事業展開には多くの人・こと・もの・お金が関わるので、そこの成り行きはもう神頼みといいますか、信仰心に近いものがあります。二十数年の習慣になりますが、敦賀にいるときは必ず早朝に起き、「日本三大鳥居」と称される気比神宮と、天筒山の中腹にある山の神神社までランニングして、お参りしているんですね。自宅からこれらを回って帰るまで５キロメートルほどとちょうど良い距離感で、雨の日も風の日も、雪の日も欠かしていません。

――木村先生の横顔が垣間見えた気がします。それでも、事業にやりがいを感じているわけですね。

振り返ると、「なぜ今こんなことをしているんだろう」と自分でもびっくりすることがあります。私たちが行っていることがうまくいっているのかそうでないか、それは時間の経過を経ないと分かりませんが、喜んでくれる人の姿を見ると実にうれしい。「クリエイティブ」とは言いすぎかもしれませんが、自分で「やるんだ」と思ったことが少しずつ形になり、結果が残っていくのは達成感があります。すると、「次に自分にできることはないだろうか」とまた突き動かされるんですね。

その意味で、地域に人が集まる場づくりは今後も考えてきたいですし、介護事業の面では「きれいなサイズダウン」も検討の余地があると考えています。私は行政の仕事にも携わっているのですが、市内の動向を見ていると、高齢化率は上がるものの人口が減っているので高齢者の数は増えてこないと予想されます。そんな流れを踏まえると、今までのように施設を増やしていく必要があるのか、それとも何らかの形で縮小してほかの活動に注力した方が良いのか、ここは考えていきたいでところです。

◆木村 晃朗（きむら・てるあき）氏

1991年金沢医科大学卒。同大学病院、恵寿総合病院を経て2000年に木村病院院長に就任。2001年に医療法人化し、2009年に病床を閉じて「明峰クリニック」を開設。2000年代からは介護事業も開始し、複数の高齢者施設やメディカルフィットネスも運営する。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索